

中島敦「文字禍」の典拠詳解

山下真史

中島敦の「文字禍」は、昭和15年頃に執筆され、17年「文學界」2月号に「古譚」の総題のもとに「山月記」と同時に発表された。古代アッシリアを舞台にしたこの作品の典拠を巡っては、木村東吉がA.T.Olmsteadの*History of Assyria* (1923)に基づいていることを指摘して以来、研究が続けられている。安福智行は、Morris Jastrow, Jr.の*The civilization of Babylonia & Assyria*を踏まえていることを指摘⁽²⁾し、梅本宣之は、中島敦が読んでいたと思われるアナトール・フランスの著書の中に「文字禍」の表現の元になったものがあることを指摘⁽³⁾している。また、山本良はこの作品のもう一つの典拠として、中島敦の蔵書にあるPhillip Van Myersの*Ancient History* (1904)を指摘⁽⁴⁾している。この本が実際に参照されたかは、以下に記すように、疑問なしとはしないが、現在の時点では、以上3点の洋書がこの小説の主な典拠と考えられているのである。

ところで、中島敦は、『古譚』所収の「狐憑」「木乃伊」「文字禍」を書く際に参考にした、あるいはしようとしたと考えられる書物のメモを残している。昭和16年の手帳の一月の欄に4頁にわたって書かれたものである（『中島敦全集3』（平成13年、筑摩書房）、『中島敦文庫自筆資料画像データベース』（平成21年、神奈川近代文学館）、所収）。

- Breasted, J. H. *Ancient Times* 7.00
Survey of the Ancient World 5.75
A History of Egypt 15.75
- Budge, Sir E. A. W. *Babylonia Life and History* 5.60
- Jastrow, M. *The Civilization of Babylonia and Ass.* 15.00
- King, L. W. *A History of B. and A.* 2 vol. 30.00⁽⁵⁾
- H. G. Rawlingson *Bactria* 7.85
- Luckenbill, D. D. *Ancient Records of A & B.* 2 vol.
- A. H. Sayce *The Hittites* 1.75
A Primer of Assyriology 1.85
Babylonians & Assyrians 3.15
Assyria 1.75

Woolley, C. L. *The Sumerians* 3.00

Olmstead *History of A.*

中島敦は、これらの情報をどこで手に入れたのか。書名の後ろに書かれた数字は、おそらく米ドルまたは英ポンドの表示であろうから、このメモの著者名・書名・価格は、洋書を扱っている書店の目録、または直接本棚で実物を見て書き写したのかもしれない。ちなみに、Rawlingson は中島敦の写し間違えで、正しくは Rawlinson である。中島敦が、これらをすべて手に入れて読んだかどうかは分からない。これらのうち蔵書として現存しているものは 1 冊もないが、購入した後売却したとも考えられるし、敦の没後、水害で廃棄された本もある。ちなみに、同じジャンルの本としては、先に触れた Myers の *Ancient History* が蔵書として残っている。和書では、バアライ著・加藤一夫訳『世界大思想全集 65 古代文明研究 (上)』(昭和 7 年、春秋社) と『世界大思想全集 66 古代文明研究 (下)』(同) が蔵書として残っている。

これらの本を調査してみると、「文字禍」執筆に際しては、既に指摘されている 3 冊のほか、上記のメモにある J. H. Breasted の *Ancient Times—A History of the early world* または *Survey of the Ancient World* が用いられているらしいことが分かった。この 2 冊は内容が重複しているところが多いので、中島敦がどちらを用いたのかは分からないが、後述するように「アラメヤ語」に関する知識が得られるのは、前者の方である。両方を手に入れて見ていた可能性もあるが、ここでは前者を参照していたとしておく。

「文字禍」は上記 4 冊 (あるいは 3 冊) を主な典拠としていることはたしかだが、本稿はこの作品の表現がどの本のどの箇所に基づいているかを詳細に考察しようとするものである。読者の便を考慮して、小説本文を挙げてから、注をつける形で考察を行った。また、煩瑣を避けるため、4 冊については以下の略号を用いることにした。

History of Assyria by A.T.Olmstead (1923) … 【A】

The civilization of Babylonia & Assyria by Morris Jastrow, Jr. (1915) … 【B】

Ancient History by Phillip Van Myers (1904) … 【C】

Ancient Times by J. H. Breasted (1916) … 【D】

*

文字禍

文字の霊などといふものが、一体、あるものか、どうか。

アッシリヤ人は無数の精霊を知つてゐる。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等、数知れぬ悪霊共がアッシリヤの空に充ち満ちてゐる。しかし、文字の精霊に就いては、まだ誰も聞いたことがない。

*夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等…中島敦の「ノート第六」に Rabisu (lying-in-wait) / Labasu (overthrower) / Lilu (Lilitu 雌) (nightspirit) / Etimmu (deadman's ghost) / Namtar (pestilence) というメモがある。これは【B】の243頁の記述に拠ったものである(安福論文)。「*Rabisu*, the one lying-in-wait; *Labasu*, “overthrower”; *Lilu* and the feminine *Lilitu*, “nightspirit”; *Etimmu*, ghost or shade, suggesting an identification of some demons with the dead who return to plague the living, *Namtar*, “pestilence,” and more like.」ただし、エティンムの英語の説明が違っている。中島敦が要約してメモしたか。

其の頃——といふのは、アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃だが——ニネズの宮廷に妙な噂があつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそ〜と怪しい話し声がするといふ。王兄シャマシュ・シュム・ウキンの謀叛がバビロンの落城で漸く鎮まつたばかりのことで、何か又、不逞の徒の陰謀ではないかと探つて見たが、それらしい様子もない。どうしても何かの精霊どもの話し声に違ひない。最近に王の前で処刑されたバビロンからの俘囚共の死霊の声だらうといふ者もあつたが、それが本当でないことは誰にも判る。千に余るバビロンの俘囚は悉く舌を抜いて殺され、その舌を集めた所、小さな築山が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しゃべれる訳がない。星占や羊肝卜で空しく探索した後、之はどうしても書物共或ひは文字共の話し声と考へるより外はなくなつた。たゞ、文字の霊(といふものが在るとして)とは如何なる性質をもつものか、それが皆目判らない。アシュル・バニ・アパル大王は巨眼縮髪の老博士ナブ・アヘ・エリバを召して、此の未知の精霊に就いての研究を命じ給うた。

*アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃…Ashur-bani-apal は、【B】【C】【D】によれば、在位、前668~626年。「ノート第六」には、669年11月に即位したというメモがあるが、これは【A】の399頁の記述による。治世第二十年目は、中島敦の考えに従えば、前649年となる。

*図書館…アッシュル・バニ・アパルが首都ニネヴェの王宮内に建てた図書館。ちなみに『中島敦全集1』(平成13年、筑摩書房)の注には、「首都ニネヴェに世界最古の図書館を造営」とあるが、最古ではない。

*毎夜、図書館の闇の中で、ひそ〜と怪しい話し声がする…中島敦の蔵書にアナトール・フランスの *The Seven Wives of Bluebeard* があるが、その中の *The Shirt of The Royal Library* という一節に、図書館の中で書物の騒々しい話し声があるという場面がある(梅本論文による)。それに拠ったか。

*王兄シャマシュ・シュム・ウキンの謀叛がバビロンの落城で漸く鎮まつたばかり…Shamash-shum-ukin は、アッシュル・バニ・アパルの兄で、バビロニア王。【A】の440~475頁にこの兄弟の争いが記述されている。それによれば、シャマシュ・

シュム・ウキンは前 652 年 5 月に反乱を起こしたが、四年後の前 648 年の 7 月には火中に身を投げ、バビロンは落城した。「Shamash-shum-ukin could expect no mercy; in despair he cast himself into the fire and perished.」(475 頁)とあり、「ノート第六」には、「Shamash-shum-ukin 火に入つて死す、」とある。

* 千に余るバビロンの俘囚は悉く舌を抜いて殺され、その舌を集めた所、小さな築山が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。…「ノート第六」には「Babylon 市民虐殺。→ Ashur につれ去られ、王の前で舌を切断さる、餓死体、満市疫病」とある。このメモは、【A】の 475 頁にシャマシュ・シュム・ウキンが死んだ後の様子について書かれた次の箇所に基づく。「…their tongues which had blasphemed the gods were cut out and they were deprived of life. The streets and public squares were choked by the bodies of those who had died of hunger and pestilence during the siege.」。一方、【C】の 69~70 頁には、アッシリア君主の俘囚に対する残忍な拷問が列挙されており、その最後に「…still others are having their tongues torn out.」とある。また、「Their men, young and old, I took prisoners. Of some I cut off the feet and hands; of others I cut off the noses, ears, and lips; of the young men's ears I made a heap;」という記述もある。山本論文では、この「heap (山のように積み重なったもの)を作った」という記述から「その舌を集めた所、小さな築山が出来た」という記述が生まれたとしている。たしかに「舌を抜いて殺され」という表現は【C】によったと考えられるが、この箇所では若い男の耳で heap を作ったとあり、舌は書かれていないので、違和感がある。【C】を見なくても、【A】からだけでもこの記述は不可能ではない。また、山本は、【C】を見ていた根拠として、“other prisoners are being flayed alive.”という記述が、ナブ・アヘ・エリバが大王の先生でなかったら「生きながらの皮剥ぎに処せられたであろう」という記述と一致することを挙げる。しかし、【A】にも生きながらの皮剥ぎが行われていたことは六箇所記述があるので、【C】を見なくても書ける。シャマシュ・シュム・ウキンの自裁の後、「千に余るバビロンの俘囚」がいて、「悉く舌を抜いて殺され」たというのは中島敦が【A】を元に膨らませたもの。

* 巨眼縮髪のお博士ナブ・アヘ・エリバ…「ノート第六」に「Ashur-bani-apal の師、/ Nabu-ah-e-eriba / (revelation of Adapa)」というメモがある。【A】の 386 頁のアシュル・パニ・アパルの父親が先生としてナブ・アヘ・エリバを選んだという記述を元にしている。「As he grew older he came to need teachers who were a little less divine. Among these, his father picked Nabu-ah-e-eriba.」巨眼縮髪は中島敦による。後に「老儒」という言い方も出てくるが、年齢不詳。

その日以来、ナブ・アヘ・エリバ博士は、日毎問題の図書館（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものである）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ、研鑽に耽つた。両河地方では埃及と違つて紙草^{メソポタミア}を産しない。人々は、粘土の板に硬筆を以て複雑な楔形の符号を彫りつけてをつた。書物は瓦であり、図書館は瀬戸物屋の倉庫に似てゐた。老博士の卓子（その脚には、

ほんもの
本物の獅子の足が、爪さへ其の儘に使はれてゐる)の上には、毎日、累々たる瓦の山がうづたかく積まれた。其等重量ある古知識の中から、彼は、文字の靈に就いての説を見出さうとしたが、無駄であつた。文字はボルシッパなるナブウの神の司り給ふ所とより外には何事も記されてゐないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、唯一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。卜者は羊の肝臓を凝視することによつて凡ての事象を直観する。彼も之に倣つて凝視と静観とによつて真実を見出さうとしたのである。その中に、をかしの事が起つた。一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、何故、さういふ音とさういふ意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒ナブ・アヘ・エリパは、生れて初めて此の不思議な事実を発見して、驚いた。今迄七十年の間当然と思つて看過してゐたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼から鱗こけらの落ちた思がした。単なるバラへの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　こゝ迄思ひ到つた時、老博士は躊躇なく、文字の靈の存在を認めた。魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないやうに、一つの靈が之を統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

- * 其の後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される…【D】の160頁に、「A great collection of twenty-two thousand clay tablets was discovered in Assurbanipal's fallen library rooms at Nineveh, where they had been lying on the floor for twenty-five hundred years.」という記述があり、同じく163頁に「Its fall was forever, and when two centuries later Xenophon and his ten thousand Greeks marched past the place, the Assyrian nation was but a vague tradition, and Nineveh, its great city, was a vast heap of rubbish as it is to-day.」という記述がある。この二つを元にした記述と考えられるが、一方、【C】の66頁にはニネヴェが前606年には滅びたとあり、それに続けて、「Two hundred years later, when Xenophon with his Ten Thousand Greeks, in his memorable retreat, passed the spot, the once great city was a crumbling mass of ruins, of which he could not even learn the name.」とある。ほぼ同じ記述だが、図書館についての記述があるのは【D】の方なので、それを元にしたと考えるべきだろう。
- * 両河地方では埃及と違つて紙草を産しない。…【A】の583頁に「Papyrus did not grow in western Asia」とある。これに拠ったか。
- * 老博士の卓子(その脚には、本物の獅子の足が、爪さへ其の儘に使はれてゐる)…「ノート第六」に「○獅子の足が机の足」というメモがある。【A】の278頁、502頁に、アシュル・パニ・アパルの宴会場には、ライオンの足のテーブルがあることが記されているが、爪についての記述はない。この記述を膨らませたものか。
- * 文字はボルシッパなるナブウの神の司り給ふ所…【A】の471頁には「Nabu was the god of wisdom, he was also the god of Borsippa」とある。ボルシッパはバビロニ

アの都市。【B】の218頁には、「His symbol is the stylus of the scribe.」という記述、219頁には「Nabu as the god of writing」という記述がある。218頁には「Writing is his invention communicated to mankind」という記述もある。

*ト者は羊の肝臓を凝視することによつて凡ての事象を直視する…【A】の587頁に「Liver divination was the method of unveiling the future」とあり、「Shumerian scholars had worked out an elaborate system of prediction based on the assumption that the future might be foretold by the most “knowing” part of the sacrificed sheep, the liver.」という記述がある。

*一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る…夏目漱石の『門』(明治43年)の「一」に宗助が細君に「何うも字と云ふものは不思議だよ」と言い、「幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ちつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。——御前そんな事を経験した事はないかい」と言う場面がある。

この発見を手初めに、今迄知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しづつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数程多い、文字の精は野鼠のやうに仔を産んで殖える。

ナブ・アヘ・エリバはニネゴの街中を歩き廻つて、最近に文字を覚えた人々をつかまへては、根気よく一々尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か變つたやうな所はないかと。之によつて文字の靈の人間に対する作用を明らかにしようといふのである。さて、斯うして、をかしな統計が出来上つた。それに依れば、文字を覚えてから急に蟲を捕るのが下手になつた者、眼に埃が余計はひるやうになつた者、今迄良く見えた空の鷺の姿が見えなくなつた者、空の色が以前程碧くなくなつたといふ者などが、圧倒的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰ヒアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰ヒツクスガ如シ」と、ナブ・アヘ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。文字を覚えて以来、咳が出始めたといふ者、くしゃみが出るやうになつて困るといふ者、しゃっくりが度々出るやうになつた者、下痢するやうになつた者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士は又誌した。文字を覚えてから、俄かに頭髪の薄くなつた者もある。脚の弱くなつた者、手足の顫ふるやうになつた者、顎がはづれ易くなつた者もある。しかし、ナブ・アヘ・エリバは最後に斯う書かねばならなかつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ麻痺セシムルニ至ツテ、スナハチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、獵師は獅子を射損ふことが多くなつた。之は統計の明らかに示す所である。文字に親しむやうになつてから、女を抱いても一向樂しうなくなつたといふ訴へもあつた。もつとも、斯う言出したのは、七十歳を越した老人であるから、之は文字の所為ではないかも知れぬ。ナブ・アヘ・エリバは斯う考へた。埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、

その影のやうなものではないのか。

獅子といふ字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子といふ字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ひ、女といふ字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くやうになるのではないか。文字の無かつた昔、ピル・ナピシュテムの洪水以前には、欲びも智慧もみんな直接に人間の中にはひつて来た。今は、文字の薄被ツエイルをかぶつた欲びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなつた。之も文字の精の悪戯である。人々は、最早、書きとめて置かなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るやうになつて、人間の皮膚が弱く醜くなつた。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜くなつた。文字が普及して、人々の頭は、最早、働かなくなつたのである。

* 埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、その影のやうなものではないのか。…エジプト人が影を魂の一部と見なしているという点は未詳。ナブ・アヘ・エリバ博士の文字についての見解は、プラトンの『パイドロス』に拠つたか。中島敦の蔵書に *Five Dialogues of Plato* (Everyman's Library, 1936) があるが、その中に *Phaedrus* が含まれており、文字を発明した Theuth (テウト) に対して Thamus (タモス) が次のように言う話がソクラテスによって紹介されている。「For this invention of yours will produce forgetfulness in the minds of those who learn it, by causing them to neglect their memory, inasmuch as, from their confidence in writing, they will recollect by the external aid or foreign symbols, not by the internal use of their own faculties. Your discovery, therefore, is a medicine not for memory, but for recollection.」文字が本物の影という考え方は、この後に続いて出てくる。パイドロスがソクラテスに「the written one may fairly be called a shadow?」と聞くと、ソクラテスが「Most assuredly I do.」と答える場面がある。

* ピル・ナピシュテムの洪水…【B】の443頁以降に大洪水の話があり、「ギルガメッシュ叙事詩」の中で、Utnapishtim がギルガメッシュにその洪水の話を語る箇所が引用されている。ただし、ピル・ナピシュテムのことをこの本では Utnapishtim と表記している。【A】の586頁には Pir-napishutim of Sippar が出てくるが、ギルガメッシュに洪水の話を語つたとは書いていない。ピル・ナピシュテムという表記は、たとえば、中島孤島編『エジプト・アッシリヤ・バビロンの神話と伝説』（趣味の教育普及会、昭和10年）に見られる。当時、ギルガメッシュ伝説がどのくらい知られていたか詳らかにしないが、中島敦が【A】～【D】以外で知っていた可能性もある。

ナブ・アヘ・エリバは、或る書物狂の老人を知つてゐる。其の老人は、博学なナブ・アヘ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草パピルスや羊皮紙に誌された埃及文字まですら――と読む。凡そ文字になつた古代のことで、彼の知らぬことはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日

の天候まで知つてゐる。しかし、今日の天気は晴か曇か気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉をも諳んじてゐる。しかし、息子をなくした隣人を何と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダッド・ニラリ王の後、サンムラマトがどんな衣装を好んだかも知つてゐる。しかし、彼自身が今どんな衣服を着てゐるか、まるで気が付いてゐない。何と彼は文字と書物とを愛したであらう！ 読み、諳んじ、愛撫するだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板を嚙砕き、水に溶かして飲んで了つたことがある。文字の精は彼の眼を容赦なく喰ひ荒し、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでゐるので、彼の驚形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出来てゐる。文字の精は、又、彼の背骨をも蝕み、彼は、臍に頸のくつつきさうな僂僂である。しかし、彼は、恐らく自分が僂僂であることを知らないであらう。僂僂といふ字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アヘ・エリバ博士は、此の男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数へた。たゞ、斯うした外観の惨めさにも拘はらず、此の老人は、実に——全く羨ましい程——何時も幸福さうに見える。之が不審といへば、不審だつたが、ナブ・アヘ・エリバは、それも文字の霊の媚薬の如き奸猾な魔力の所為と見做した。

* 或る書物狂の老人…梅本論文によればこの老人はアナトール・フランスの『シルヴェストル・ボナルの罪』のボナルの姿に重なるという。しかし、ボナルはこの老人よりはるかに行動的であつて、その点で「彼（書物狂の老人——引用者）の姿とボナルのそれとが重ねあわされることは明らかであらう」という見解は首肯しがたい。

* スメリヤ語やアラメヤ語…スメリヤ語はシュメール語のことで、【A】では Shumerian language という表記である。【B】では Sumerian language という表記が用いられており、セム語ではないことが述べられている。【C】の 48 頁には、Sumerian というセムではない民族がいたことが書かれている。【D】の 109 頁には「Early Sumerian Clay Tablet with Cuneiform, or Wedge-Form, Writing (Twenty-eighth Century B.C.)」というキャプションで、写真が載っている。上記『エジプト・アッシリヤ・バビロンの神話と伝説』には、「スメリヤ」、「スメリヤ人」という表記があるが、上記『古代文明研究』には「スメル人」という表記がある。「スメリヤ語」という表記が一般的だったかは未詳。中島敦の「文字禍」の下書き（「ノート第三」）には「シュメール語」、「スメリヤ語」の両方の表記がある。アラメヤ語は、【A】に Aramaeans, Aramaic language という記述が多数出てくるが、【D】の 146 頁には Aramaeans についてのまとまった記述があるので、それに拠つたか。ただし、アラメヤ語という表記がどの本に拠つたかは未詳。当時はギリシヤ、バビロニア、アッシリヤなどのように「○○○ヤ」という表記があつたが、『古代文明研究』ではバビロニア、アッシリアであり、両方の表記が通用していた。なお、『中島敦全集 1』の注には、アルメニア語とあるが、間違いである。

* ツクルチ・ニニブ一世王…【B】の 165 頁に「Shalmaneser I (c. 1300 B.C.) and

Tukulti-Ninib I (c. 1290 B.C.), the aggressive policy reaches the height of its success.」とある。【A】にはこの王についての記述はない。

- * 少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉…ギルガメシュがピル・ナビシュテムを尋ねて行こうとした時に、Sabitu という海の女王がギルガメシュにそれは無理だと言って、詩を詠む場面がある。【B】の 461～462 頁に記述がある。中島敦は「ノート第六」に 462 頁の詩を書き写している。
- * アダッド・ニラリ王の後、サムラマト…「ノート第六」に「Adad-Nirari (812-782) (その初めは母の Sammuramat が治める) (Semiramis)」というメモがある。在位期間は【A】の 75 頁に「the third Adad-nirari (812-782)」とあるのに拠る(【B】の 220 頁には、Adad-Nirari IV (810-782) とあるが、中島敦はこれは参照しなかったのだろう)。【A】の 158 頁に「The reign of Shamashi Adad was short and its significance small. Yet it was his fate to marry a princess whose name was to go down the ages, long after his own was forgotten, as the most beautiful, most cruel, most powerful, and most lustful of Oriental queens, Sammuramat, or, to give her the more familiar Greek appellation, Semiramis.」とある。サムラマトは、ギリシアのセミラミスのモデルとして有名だが、この記述にあるように、シャマシ・アダッドの後であり、「アダッド・ニラリ王の後」は中島敦の誤記である。【A】の 159 頁には、その子アダッド・ニラリが五年して大人になり、セミラミスが力を失ったとある。ちなみに『中島敦全集 1』の注には、アダッド・ニラリ王について「アッシリア王として前一三〇七—前一二七五に在位したアダド・ニララー一世」とあるが、間違いである。

偶々アシュル・パニ・アバル大王が病に罹られた。侍医のアラッド・ナナは、此の病輕からずと見て、大王の御衣裳を借り、自ら之をまとうて、アッシリヤ王に扮した。之によつて、死神エレシュキガルの眼を欺き、病を大王から己の身に転じようといふのである。此の古来の医家の常法に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。之は明らかに不合理だ、エレシュキガル神ともあらうものが、あんな子供瞞しの計に欺かれる筈があるか、と、彼等は言ふ。碩学ナブ・アヘ・エリバは之を聞いて厭な顔をした。青年等の如く、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらをかしな所がある。全身垢まみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾つてあるやうな、さういふをかしな所が。彼等は、神秘の雲の中に於ける人間の地位をわきまへぬのちや。老博士は浅薄な合理主義を一種の病と考へた。そして、其の病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

- * 偶々アシュル・パニ・アバル大王が～病を大王から己の身に転じようといふのである。…「ノート第六」に「医者王 Bani-apal に扮する 死神 Ereshkigal を欺くため。侍医 Arad Nana」というメモがある。【A】の 406 頁には Arad Nana が physician であることが書かれており、412 頁には「The crown prince, Ashur-bani-apal, has the fever, the god is angry because of the king's sin, let the king make his

prayers of supplication in that day. The physician will make a substitute image in human form for the crown prince, with a view of thus deceiving Ereshkigal, the goddess of the dead.」という記述がある。

或日若い歴史家（或ひは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？ と。老博士が呆れた顔をしてゐるのを見て、若い歴史家は説明を加へた。先頃のバビロン王シャマシュ・シュム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月程の間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送つたといふものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けたといふものもある。第一の妃唯一人と共に火に入つたといふ説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入つたといふ説もある。何しろ文字通り煙になつたこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王は其等の中の一つを選んで、自分にそれを記録するやう命じ給ふであらう。これはほんの一例だが、歴史とは之でいゝのであらうか。

- * 歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブ…「ノート第六」には、「Ishdi Nabu / scribe of New House」というメモがある。【A】の394頁の「The scribe of the “New House,” Ishdi Nabu」という記述に拠っている。
- * 歴史とは何ぞや？…歴史をめぐる議論について、梅本はアナトール・フランスの『シルヴェストル・ボナールの罪』の後半に出てくるジェリスの発言と共通した発想があること、『ペンギンの島』にも類似の記述があることを指摘している。
- * 毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けた…「ノート第六」には「Shamash-shum-ukin は Shamash に祈る、」というメモの後、「Like a dove moan I day and night;…」以下、【A】の474頁からの引き写しがある。これを元にした記述である。
- * 第一の妃唯一人と共に火に入つた～自分も火に入つたといふ説もある。…「ノート第六」に「612 八月 Nineveh 落城」とあるが、【A】の638頁には、ニネヴェ落城の時、当時の王シン・シャル・イシュクン（アッシュ・パニ・アパルの息子）についての記述がある。「Tradition related that, like the unhappy Shamash-shum-ukin, he heaped up a funeral-pile and burned himself with all his most cherished possessions.」つまり、シン・シャル・イシュクンは、シャマシュ・シュム・ウキンのように、薪を積み上げてすべてのもっともお気に入りのものと火の中に入った、という伝説があるという。これに拠ったか。

賢明な老博士が賢明な沈黙を守つてゐるのを見て、若い歴史家は、次の様な形に問を変へた。歴史とは、昔、在つた事柄をいふのであらうか？ それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？

獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同してゐるやうな所が此の間の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言へないので、次の様に答へた。歴史とは、昔在つた事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。

書洩らしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事ぢや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのぢやわい。歴史とはな、この粘土板のことぢや。

若い歴史家は情なささうな顔をして、指し示された瓦を見た。それは此の国最大の歴史家ナブ・シャリム・シュヌ誌す所のサルゴン王ハルディア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子が其の表面に汚らしくくつついてゐる。

* 此の国最大の歴史家ナブ・シャリム・シュヌ誌す所のサルゴン王ハルディア征討行…「ノート第六」に「Sargon 時代の歴史家／宮廷史官／Nabu-shallim-shunu, son of Harmakki (the royal scribe) / 714」というメモがある。【A】の229頁に「the great scribe of the king, Nabu-shallim-shunu, son of Harmakki, the royal scribe」とある。また166頁には「Assyria's greatest enemy was now Haldia.」という記述があり、229頁には、前714年にcampaignが行われたとある。

ボルシッパなる明智の神ナブウの召使ひ給ふ文字の精霊共の恐しい力を、イシュディ・ナブよ、君はまだ知らぬと見えるな。文字の精共が、一度或る事柄を捉へて、之を己の姿で現すとすると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのぢや。反対に、文字の精の力ある手に触れなかつたものは、如何なるものも、その存在を失はねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられてゐない星は、何故に存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載せられなかつたからぢや。大マルツク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現ればアモル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそぢや。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬といふ字が無かつたからぢや。此の文字の精霊の力程恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使つて書きものをしとるなどと思つたら大間違ひ。わしこそ彼等文字の精霊にこき使はれる下僕ぢや。しかし、又、彼等精霊の齋す害も随分ひどい。わしは今それに就いて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるやうになつたのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、其の霊の毒氣に中つたためであらう。

* ボルシッパなる明智の神ナブウ…先述したように、【A】の471頁には「Nabu was the god of wisdom, he was also the god of Borsippa」とある。

* アヌ・エンリルの書…【A】の270頁にある「The great astronomical work, *When Anu, Enlil, etc.*, forecasts, observations of the moon and stars,…」のこと。589~590頁には「Assyrian scholars took the system over without change, and in their letters regularly cite verbatim the Anu-Enlil series.」とある。アヌ・エンリルの書は、アッシリアの学者に逐語的に引用される天文学の宝典であるということである。現在、一般に「エヌマ・アヌ・エンリル」と呼ばれているタブレット集を指す（Whenはアッカド語のエヌマにあたる）。ちなみに『中島敦全集1』の注には「古代バビロニアの神で、天神アヌ、水神エア、宇宙神エンリルと三神一体となって一座をなす。

代々多くの王者がその後裔と称した。「書」はその神々の事跡を記したものの。」とあるが、何を指しているのか不詳。

- * 大マルツック星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒が降る…【A】の387頁に「If Jupiter enters Orion, the gods will rage against the land.」とある。「ノート第六」には「Jupiter = Marduk」とあるが、これは【A】の592頁の「Jupiter was the royal star and was identified by the citizens of Babylon with Marduk;」という記述による。また、「牧羊者（オリオン）」は、同頁の「the star of the faithful shepherd, Orion」という記述による。
- * 月輪の上部に蝕が現れればアモオル人が禍を蒙る…【A】の591頁に月蝕の箇所が悪いことが起こる場所を示すという記述がある。「the exact point where the eclipse began and withdrew are the points to be considered in fixing its evil」とある。589頁には、月面は四つの部分に分けられており、591頁には、「The right of the moon is Akkad, the left Elam, the upper part is Amurru, the lower is Subartu.」とある。これらをつなげた記述である。
- * 古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだ…【D】の107～109頁には、紀元前3000年頃にSumeriansと呼ばれる人たちがいて、彼らは、牛、羊、山羊などを飼っていたが、「But the horse was still unknown.」とある。

若い歴史家は妙な顔をして帰って行つた。老博士は尚暫く、文字の霊の害毒があの有為な青年をも害はうとしてゐることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎて却つて文字に疑を抱くことは、決して矛盾ではない。先日博士は生来の健啖に任せて羊の炙肉を殆ど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。

青年歴史家が帰つてから暫くして、ふと、ナブ・アヘ・エリバは、薄くなつた縮れつ毛の頭を抑へて考へ込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力を讃美しはせなんだか？ いま―しいことだ、と彼は舌打をした。わし迄が文字の霊にたぶらかされをるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊が或る恐い病を老博士の上に齎してゐたのである。それは彼が文字の霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと睨み暮した時以来のことである。其の時、今迄一定の意味と音とを有つてゐた筈の字が、忽然と分解して、単なる直線どもの集りになつて了つたことは前に言つた通りだが、それ以来、それと同じ様な現象が、文字以外のあらゆるものに就いても起るやうになつた。彼が一軒の家をじつと見てゐる中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰との意味もない集合に化けて了ふ。之がどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体を見て、其の通り。みんな意味の無い奇怪な形をした部分々々に分析されて了ふ。どうして、こんな恰好をしたものが、人間として通つてゐるのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、凡ての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今迄の意味を失つて了つた。最早、人間生活の凡ての根柢が疑はしいものに見える。ナブ・アヘ・エリバ博士は気が違ひさうになつて来た。文字の霊の研究を之以上続けては、しまひに其の霊の

ために生命をとられて了ふぞと思つた。彼は怖くなつて、早々に研究報告を纏め上げ、之をアシュル・バニ・アパル大王に献じた。但し、中に、若干の政治的意見を加へたことは勿論である。武の国アッシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれて了つた。しかも、之に気付いてゐる者は殆ど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍を噬むとも及ばぬであらう云々。

文字の霊が、此の讒誘者をただで置く訳が無い。ナブ・アヘ・エリバの報告は、いたく大王の御機嫌を損じた。ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、之は当然のことである。老博士は即日謹慎を命ぜられた。大王の幼時からの師伝たるナブ・アヘ・エリバでなかつたら、恐らく、生きながらの皮剥に処せられたであらう。思はぬ御不興に愕然とした博士は、直ちに、之が奸譎な文字の霊の復讐であることを悟つた。

* ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王…【B】の220頁に「Ashurbanapal, the greatest of the Assyrian kings (668-626 B.C.), is among those who pay homage to Nabu」とある。また、【A】の489頁にはアシュル・バニ・アパルについて、「he owned a very genuine interest in culture of every sort」とある。上記『エジプト・アッシリヤ・バビロンの神話と伝説』の509頁には「アッスル・バニ・バルは支配者としては、女々しいだらしない王であつたとしても、文学の保護者としては第一人者でありました。」とある。

* 生きながらの皮剥…【A】の208頁に、恐ろしい刑罰として「the executioner seized a short curved knife and, beginning with his right arm, flayed him alive.」とある。そのほかの箇所にも生きながらの皮剥についての記述がある。

しかし、まだ之だけではなかつた。数日後ニネゴ・アルベラの地方を襲つた大地震の時、博士は、たまへ自家の書庫の中にあつた。彼の家は古かつたので、壁が崩れ書架が倒れた。夥しい書籍が——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共に此の讒誘者の上に落ちかゝり、彼は無慙にも圧死した。

* ニネゴ・アルベラの地方を襲つた大地震…【A】の616頁に「near-by cities of Nineveh and Arbela」という記述がある。また【A】の巻末の地図を見ると、アルベラはニネヴェの東隣にあることが分かる。ただし、地震については未詳。

【注】

- (1) 木村東吉「古譚」成立期考」（『日本文学』昭55・7）。
- (2) 安福智行「中島敦「文字禍」論——その成立過程について——」（『京都語文』平13・5）。
- (3) 梅本宣之は「中島敦文学におけるアナトール・フランス受容・補遺——「文字禍」を中心に——」（『帝塚山学院大学 日本文学研究』平21・2）で、「文字禍」の記述の元になったものとしてアナトール・フランスの書物をあげている。ただし、梅本は「これら（中島の蔵書中のアナトール・フランスの著書——引用者）のうちかなりのものに少なからぬ書き込みやアン

ダーラインがあり、また、例えば『Thais』や『The crime of Sylvestre Bonnard』などには翻訳を試みた形跡さえ見られる」と言うが、これらの書き込みは中島敦のものでない可能性が高い。特に後者は、本を見れば明らかだが、中澤誠という人物の旧蔵書で、この書き込みは、中澤が自分が受けた授業のために予習したもの、また、授業中に書き込んだものであろう。筆跡も全く違い、中島敦が〈翻訳を試みた形跡〉を読み取ることはできない。

- (4) 山本良「文学と教育は不倶戴天の敵——中島敦「古譚」研究への補助線——」（『国語と国文学』（平 27・11）。
- (5) このメモは、Leonard William King(1869-1919)の *A History of Babylonia and Assyria* (London, Chatto & Windus) を指していると考えられるが、これは第1巻が *A History of Sumer and Akkad*、第2巻が *A History of Babylon*、第3巻が *A History of Assyria* という全3巻からなるシリーズものの総題である。1923年発行の第1巻の巻頭には、第3巻は準備中と記されている (*A History of Babylon* (London, Chatto & Windus) は単体では1915年に発行されている)。第3巻は管見の限りでは発行されていないようで、とすれば、中島敦のメモにある「2 vol.」は第1巻と第2巻を指しているのだろう。

【付記】

本稿執筆に際しては、アッシリア学の研究者、唐橋文氏（本学文学部教授）にたびたびご教示を賜った。厚く感謝申し上げます。

（やました まさふみ 本学教授）